

星野一郎教授追悼号に寄せて

星野一郎教授急逝の訃報に接したのは、研修先の残暑が厳しい上海だった。寝苦しい夜中に、中国人同僚から連絡があった Wechat の画面を何度も確認してみたが、信じたくない現実だ。あれこれ脳裏をよぎって、眠れないまま朝を迎えていた。

星野教授は話し好きな同僚であった。2000年にマネジメント専攻が立ち上げられて間もなく、星野教授を含め、4名の教員が筑波大学と一橋大学の社会人大学院へ見学に派遣された。わたしも同行したが、冗談交じりで話題が多い星野教授がいるせいか、4時間の上京新幹線はあっという間だった。それ以来、仕事以外にも彼の時に饒舌とも思えるような話を幾度も聞いた、または聞かされた。それは、蛍を見る初夏にあった呉市在住のゼミ生のホームパーティーであったり、中国のお酒を嗜む機会のある広島の新繁街本通にある中華料理店であったり、或いは研究室で若いころ稼いだお金で購入されたシャガールの絵を得意そうに語る時であった。星野教授の講義を聞いてきた留学生が「星野先生の授業は面白い」と感想を漏らしていたが、それは身の上話か得意話、或いは人生訓のような話しだったのではないかと推測する。

星野教授は仕事が好きな人であった。教育と研究はもちろんのこと、大学の組織運営にも精力的だった。社会科学部研究科の科長室会議や代議員会で異議申し立ての場面を何度も目にすることがある。それも慎重に言葉を選びながら発言し、常にロジック的な展開に努めようとした。財務担当の学長補佐と副理事を担ってきたが、ご専門の会計学で培われた特性によるものか、資金運用に関してどうやら厳しかったらしい。オフィスポリティックスに遭遇することもある大学運営の中でさぞかし反感を招かれたのだろうが、それにしても、あるリーダーから「星野さんは憎めない人」と評される。それは最大の褒め言葉ではないかと思われる。

星野教授は研究業績のある昭和時代育ちの大学人であった。マネジメント専攻長室の外側にある「教員著書展示コーナー」の棚に「星野一郎」と記された冊数が多い。「よく本を出されるね」と羨望の目で会話を交わすと、「いや、それはそれまでのものをまとめたものにすぎない」と謙遜ぶりだった。しかしなぜか、それはわたしには研究者としての矜持また一種の自負にしか見えなかった。ある英文学者が「修業中の身である40前に毎日楽しくて仕方ないなんて奴はロクなものじゃない」と述懐している。故郷の三原を離れた彼が東京そして信州で修業していた20数年間は甘苦とも味わった日々には違いない。

彼の急逝で取り残されてしまった博士論文や修士論文を仕上げようとしている数名の星野ゼミ生、完成間近だった彼の著書、論文等の遺稿、マネジメント専攻からマネジメントプログラムへの移行に伴う様々な検討事項、等々を思うと、名状しがたい無念さが胸がつまっている。

今やコンビニ弁当を手にも研究室へさっさと消え去った星野教授のジーパン姿を眼前に浮かべることしかできないでいる。

広島大学マネジメント学会長

盧 濤

2020年1月に東千田キャンパスにて